令和七年度　山口県立大学　国際文化学部　文化創造学科
学校推薦型選抜（県内高校枠）「小論文」　問題用紙

問　次の文章を読み、その要旨を示したうえで、文章を書く際の心構えについて、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

私たちは日本語に慣れ切っている。幼い時から、私たちは日本語を聞き、日本語を話し、日本語を書き、日本語で考えて来た。私たちにとって、日本語は空気のようなもので、日本語が上手とか下手とかいうのさえ滑稽なほど、私たちはみな日本語の達人のつもりでいる。いや、そんなことを更めて考えないくらい、私たちは日本語に慣れ、日本語というものを意識していない。これは当り前のことである。しかし、その日本語で文章を書くという時は、この日本語への慣れを捨てなければいけない。日本語というものが意識されないのでは駄目である。話したり、聞いたりしている間はそれでよいが、文章を書くという段になると、日本語をハッキリ客体として意識しなければいけない。自分と日本語との融合関係を脱出して、日本語を自分の外の客体として意識せねば、これを道具として文章を書くことは出来ない。文章を書くというには、日本語を外国語として取扱わなければいけない。

日本語を自分の外部の客体として摑むというチャンスは、普通は、私たちが外国語を勉強する時に訪れるものである。全く外国語と縁がなかったら、日本語が言語そのものということになり、日本語が日本語として自覚される折がないであろう。日本語の自覚が外国語との接触から起るということは、民族についても、個人についても、同様に言い得る。明治年代の初め、日本人が西洋と本格的に接触するようになってから、西洋諸国の国語との比較において、日本語が意識の新鮮な対象になり始めた。また、個々の日本人についても、英語などを学び始めると同時に、今まで慣れ親しんで来た日本語に向って新しい眼が開かれるようになる。

文章を書く時は、日本語も外国語として取扱わねばいけない、と私は言ったが、私たちは、外国語の勉強を通して、日本語を一種の外国語のように取扱う地点に立つことが出来るのである。言い換えれば、外国語の勉強は、日本語で文章を書く上に大きなプラスなのである。これが民族としての日本人の全体に当て嵌まるか否かは、専門家に尋ねてみないと判らないが、少くとも、私自身にとって、これはよく当て嵌まる。普通の順序とは少し違って、私はドイツ語、フランス語、英語……という順序で外国語を勉強して来た。幸い、外国語の勉強は好きでもあり、専門の仕事の必要もあって、私は永く外国語の本を読んで来た。もう随分慣れている筈である。しかし、何年経っても、それが母国語との差異なのであろうか、サッと眼を通しただけでは、何も見当がつかない。眼へ飛び込んで来る感じというようなものが全くない。日本語の本なら、パッと判る、というより、パッと判ったような気持になれる。外国語の場合は、特に以前はそうであったし、今も不得意な外国語ほどひどいのだが、私は数式を解くのと同じ態度で読んでいる。外国文の一句が方程式のように見え、一語一語が数字のように見えて来る。訳語の判っている単語はよいが、判っていないものは、辞典で調べねばならぬ。判っているのは既知数で、判っていないのは未知数である。単語の意味が判っても、沢山の単語を結び合わせている関係となると、これは文法によって解釈しなければならない。数式を解く場合も論理が働いているが、外国語の場合も論理が文法と一つになって働いている。辞典と文法とを頼りにして、私は全く理づめの方法で外国語の文章を読んで行かねばならぬ。事実、私はこのような方法で読んで来た。

ここで、どうしても、若干の問題が現われる。外国人が日本語の文章を読む時は、やはり、数式を解くような態度になるものであろうか。日本人でも、日本語の文章を読み慣れていないと、数式を解くような調子になるものであろうか。漢字のような象形文字とアルファベットのような標音文字（注1）との違いが物を言っているのであろうか。しかし、今は、これらの問題に立ち入るよりは、外国語の文章という数式を解く努力を重ねているうちに、私自身、数式を組み立てるようなつもりで日本語の文章を書くことになってしまったという事実が大切である。数式のような文章が良いか悪いか、好きか嫌いかについては多くの意見があるであろう。私にしても、数式でありさえすればよいと主張するつもりはない。しかし、知的散文としての論文である以上は、数式が骨格にならねばならない。わざと形を崩すのも、洒落るのも、読者を楽しませるのも、骨格の修業が済んだ後の話である。私はそう信じている。幸か不幸か、日本文の骨格を学ぶために、私は外国文という遠い迂路を歩まねばならなかった。文章を書き始めるというのは、幾何学の勉強の出発点に立つことである。どんなに小さな狂いがあっても、それでお仕舞になる。書き始めのところでは、数式を組み立てるような、数式を解くような態度が特に必要であると思う。

（出典　清水幾太郎『論文の書き方』岩波書店、二〇一五年改版、八七～九〇頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）

（注1）表音文字に同じ。

令和７年度　国際文化学部　文化創造学科　学校推薦型選抜（県内高校枠）
小論文　出題意図

【課題文の出典】
清水幾太郎『論文の書き方』岩波書店、2015 年改版、87～90 頁。

【出題意図】
この設問は、文章を書く際の心構えについての見識を問うものである。
筆者は、日本語を道具として文章を書く際には、日本語を自分の外部の客体として意識し、数式を解くのと同じ態度で接する必要があるとする。その意義を具体的に理解できる思考力が身についているかを評価する。また、受験者が、自らの経験や知識に基づいて、自身の考えを日本語で適切に表現できているかを問うものである。